

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：17601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：23500697
研究課題名(和文) 体育教師の運動指導力向上を目的とした養成・研修プログラムの内容開発

研究課題名(英文) The Contents Development of PE Teacher Training

研究代表者
三輪 佳見 (Miwa, Yoshimi)
宮崎大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00182064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)： 体育教師の運動指導力向上プログラムの内容開発に有効な資料を提供する目的で、運動の意味構造の分析から子どもの実態に合ったきめ細かな系統的な運動教材を開発し、この運動教材を用いた授業を実践することによって教師の授業改善を図るという課題に取り組んだ。

小学校の教諭は幼稚園教諭から、中学校教諭は小学校教諭から児童生徒の学習履歴を聞き取り、子どもの発達レベルに適合した運動教材を筆者とともに考案し、授業を実践した。その結果、教員は従来の単元指導計画を、とくに導入に関して変更し、授業を改善できた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to enhance teachers' ability to improve the physical education class. In order to understand the learning readiness of a child, the junior high school teacher obtained information about the motor skill level of the child through the primary school teacher. The primary school teacher, in turn, obtained this information from the kindergarten teacher. To facilitate the improvement of classes for children, sequential teaching materials were developed that matched the motor skill levels of the children and these were provided according to their learning readiness. Consequently, teachers could make their lesson plans more effective and improve the physical education classes.

研究分野：スポーツ運動学 体育科教育

キーワード：運動指導 体育教員養成 運動教材

1. 研究開始当初の背景

OECDによる生徒の学習到達度調査(PISA)などの国際的な調査結果も踏まえて、中央教育審議会は2003(平成15)年の答申のなかで、まずは「確かな学力」の育成を進めるべきであるという考えを示した(中央教育審議会:初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申))。それに続くようにして、2005(平成17)年には、義務教育の在り方について審議を進め、「義務教育の到達目標を明確化し、教育内容の改善を図る」とともに、「質の高い教育を保証する」ことや、「教員養成の質的な水準を高め、採用後も教師の質が常に向上するような仕組みの充実を図る」ことを答申した。

体育の専門部会においても、「すべての子どもたち」に共通して最低限必要なもの、いわゆる「ミニマム」について検討された。このような議論を踏まえて、2008(平成20)年に公表された学習指導要領解説においては、小学校体育編、中学校保健体育編ともに、小学校から高等学校にいたるまで、一貫して「生涯にわたって運動に親しむ能力」を育てることが体育の目標に掲げられている。そして、「運動を豊かに実践していく観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化」が改訂のポイントとして挙げられている。

ところで、このような生涯スポーツの基礎を体育授業でつくるためには、スポーツを実践するための新しい動きかたを子どもたちに習得させられる体育教師の存在が不可欠である。しかし、子どもたちの感覚に合わせて指導することは非常に難しい。なぜならばたとえば走ったり跳んだり、ボールを捕ったり投げたりすることは、教師自身、子どものころの遊びのなかでほとんど意識することなく身につけてきた動きであり、どのような道筋を通してできるようになったか覚えていないからである。

したがって、指導内容として取り上げる運動の意味構造を検討し、子どもが運動のどこに難しさを感じているのか明確にしたうえで、子どものレディネスに適合した運動教材をつくり、授業に適用していくことが必要である。

2. 研究の目的

これまでの研究によって、「こんなこともできない」と思われてしまう子どもでも、その発達レベルをどのような動きならばできるのか詳しく調べ、そこから指導を開始し、運動の構造分析から発展の道筋を作れば運動ができるようになることが明らかになった。

また、教職大学院の「学校における実習」(教職大学院の教育実習)において、運動の構造分析に基づいて、小学校・中学校の体育授業の単元計画作成から毎時の授業の事後指導まで筆者が指導したところ、現職教員の

大学院生の運動認識に変化が見られた。さらに、科学研究費補助金による研究のフィールドとなっている宮崎大学附属校スポーツ・体操教室の幼児クラスでは、親子で活動してもらっているが、親に動きの構造と指導方法の意味について説明したところ、親の運動観察に変容が見られた(幼児の長なわとびの動感促発分析、伝承9号、2009)。

このような研究の成果から、指導内容の運動の構造・系統性の理解を深めることが体育教師の指導力向上に有効であると考えられる。

2008(平成20)年に公示された学習指導要領解説では、これまで以上に指導内容の体系化が図られ、たとえば器械運動系において、従来のように技名だけでなく、「大きな前転」(両手を着き、足を強く蹴って腰を大きく開いて回転し、回転の勢いを利用してしゃがみ立ちになること)のように、技さばき、つまり動きかたも含め、技の発展的な学習が明確に示されている。また、ボール運動系では、「型」として種目固有の技能ではなく、攻守の特徴(類似性・異質性)や「型」に共通する動きや技能を系統的に身につけるという視点から種目が整理された。

しかし、子どもができるようになるための具体的な教材は、まだ十分に開発されているとはいえない。また、それらを子どもの発達に合うように変形したり、新しく別の教材を開発したりするには、運動の構造や運動発達などの理論的基礎を理解し、実践に適用できる力が教員に必要である。

そこで本研究は、次の2つの課題に取り組むことによって、体育教師の運動指導力向上プログラムの内容開発に有効な資料を提供する目的で進められた。

課題1:運動の意味構造の分析から子どもの実態に合ったきめ細かな系統的な運動教材を開発する。

課題2:開発した運動教材を用いた授業を実践し、教師の授業改善を図る。

3. 研究の方法

(1) 運動教材の開発

平成11年度から筆者が指導している宮崎大学教育文化学部附属校スポーツ・体操教室を主な研究フィールドとして、指導実践しながら運動教材を開発する。

1) ボール操作

「こう投げたほうがよい」、「このようなフォームで打つべきだ」と一般的に実技の副読本に取り上げられているような指導内容を、そのまま教えることはいったん停止する。そして、人間の運動発達過程で、どのような状況において、どのような意味をもって投げたり、打ったりすることが、どのような動きかたで発生してくるのか検討することによって、子どものレディネスに適合したボール操作に関する教材を開発する。

2) 走・跳の運動

走ったり跳んだりする運動は、一般的には意図的な指導訓練を受けずに、日常生活のなかで自由習得によって発生する。そこで、走り方や跳び方を多様化し、スポーツの運動に発展させられるような教材を開発する。

3) 非日常性の運動

非日常的な逆位になる運動や水といった特殊な環境の下で行われる運動は、特別な指導がなければ子どもはなじむことができない。とくに、こわいと感じる場合もあり、どこにこわさを感じるか検討し、子どもがなじめるような教材を開発する。

(2) 授業改善の取組

学部と附属学校園の共同研究において、ボール運動(球技)を取り上げる。筆者が開発した教材について、運動の意味構造を教諭に解説する。教諭が把握している児童生徒の技能の実態に基づいて、筆者と教諭で教材を修正する。この教材を用いて教諭は授業を実践し、これまでの自身の行った授業と比較する。

1) ゲーム教材の開発

できない児童・生徒がどういうことに難しさを感じているのか検討するために、ボールという動く対象物に対して、自己の身体をどういう向きで、どれぐらいの距離に位置づけ(定位感・遠近感)さらにいつ、どれぐらいの速さで位置を変えるかという能力(時間化能力)が求められることを確認する。ルールや使用する用具などを児童生徒の技能に基づいて検討し、系統性をもった複数のゲームを考案する。

2) ゲーム教材を適用した実践

附属学校教諭が児童生徒の実態に応じてアレンジし、授業を実践する。そして、実践した授業を筆者とともに振り返り、教諭は従来の自身の指導実践と比較し、自己の変容に関して論述する。

4. 研究成果

(1) 課題1

発達期に特徴的な動き方、すなわち子どもの動きの類型を手がかりにして、子どもの運動発達レベルに適合する運動教材を開発した。

1) ボール操作

バスケットボールのシュートのように、目標に向かって直線的にねらえない投げ方を指導するための運動教材を開発した。また、捕る技能を向上させるために、自己の身体を飛んでくるボールに適切に位置づける教材をつくった。さらに、ボレーに関して、強く弾き返すために捕らえやすいボールが提供される教材を提示した。

2) 走・跳の運動

学校体育で直接的な学習内容とならない蛇行しながら走る運動を発生させるための教材を開発した。またハードル走に関して、跳から走に移る局面で動きが途切れがちである問題を解決するために、跳び下りて走る教材を設定し、生徒の動きを改善することができた。

3) 非日常性の運動

水泳のクロールを取り上げ、背浮きでのバタ足から指導する教材を開発し、息継ぎができない子どもの泳ぎを改善した。

またマット運動の倒立や跳び箱運動の切り返し系の技について、身体のどこに、どのように力を入れたらよいのか学習者が感じ取れるような教材を開発した。

(2) 課題2

課題1の運動教材の考え方を活かし、子どもの学習レディネスを異校種間の連携で把握することによって、現職教員は従来の単元指導計画を、とくに導入に関して変更し、授業を改善できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計23件)

三輪佳見・渡瀬善和・外園武志・西田英司・竹内理代・日高正博：幼小中連携によるサッカーの系統的指導について、宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要第23号、115-125(2015) 査読無

三輪佳見：助走すると打点は低くなる、体育科教育 第63巻 第3号、68-71(2015) 査読無

三輪佳見：スパイクはどのような順序で指導するべきか、体育科教育 第63巻 第2号、62-65(2015) 査読無

三輪佳見：集団によるフェイント、体育科教育 第63巻 第1号、74-77(2015) 査読無

三輪佳見：「見せかける」フェイント、体育科教育 第62巻 第12号、42-45(2014) 査読無

三輪佳見：自分の動きの大きさは目に見えない、体育科教育 第62巻 第11号、74-77(2014) 査読無

三輪佳見：目に見えない的に投げる、体育科教育 第62巻 第10号、58-61(2014) 査読無

三輪佳見：目に見えないモノを捕る、体育科教育 第62巻 第9号、46-49(2014) 査読無

三輪佳見：曲がりながら走る動きを育てる、体育科教育 第62巻 第8号、64-67(2014) 査読無

三輪佳見：「走・跳」を繰り返すハードル走の難しさ、体育科教育 第62巻 第4号、

74 - 77 (2014) 査読無

三輪佳見: 「開脚」の技は脚を大きく開けばよいのか、体育科教育 第62巻 第3号、62 - 65 (2014) 査読無

三輪佳見: ダイビングヘッドも着地から、体育科教育 第62巻 第2号、58 - 61(2014) 査読無

三輪佳見: スポーツの基本としての跳び下り、体育科教育 第62巻 第1号、64 - 67 (2014) 査読無

三輪佳見・宮田直之・外園武志・野邊麻衣子・渡瀬善和・津留恵美: 幼小中連携によるネット型ゲームの体系化について、宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要 第21号、131 - 139 (2013) 査読無

三輪佳見: サーブは飛んでくるボールを打つよりも難しい?、体育科教育 第61巻 第9号、58 - 61 (2013) 査読無

三輪佳見: 「虫取り網キャッチ」から始めるバッティング指導、体育科教育 第61巻 第8号、74 - 77 (2013) 査読無

三輪佳見: 「ラッコ浮き」を用いたクロールの指導、体育科教育 第61巻 第7号、58 - 61 (2013) 査読無

三輪佳見: 運動学を授業に活かすために、体育科教育 第61巻 第5号、42 - 45(2013) 査読無

三輪佳見: つながりのあるゴール型ゲームの指導体系の構築をめくって、体育科教育 第61巻 第2号、18 - 21 (2013) 査読無

三輪佳見・津村亜季・中倉信博・渡瀬善和・田爪聖啓・外園武志: 異校種の連携による小学校ネット型ボールゲームの系統的指導宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要 第20号、27 - 41 (2012) 査読無

①宮内孝・三輪佳見: ボールを捕ることが苦手な小学校低学年児童の促発指導、スポーツ運動学研究 24、49 - 63 (2011) 査読有

②三輪佳見・竹内理代・中倉信博・渡瀬善和: ボール運動領域におけるゴール型ゲームの系統的指導、宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要 第19号、105 - 117 (2011) 査読無

③三輪佳見: 日本体育学会第61回大会体育科教育学専門分科会シンポジウム報告 テーマ; 大学における体育教師養成における質的保証をどうするのか「修士レベルの質的保証について」、体育科教育学研究 第27巻第2号、35 - 41 (2011) 査読無

[学会発表](計1件)

Yoshimi Miwa: Zu den Gerätehilfen für das Bewegungslernen beim Kraulschwimmen、8.Deutsch-Japanisches Symposium、2012年10月5日、Universität Münster

[図書](計2件)

三輪佳見: 体育におけるネット型ボールゲームの一貫教育; 河原国男・中山迅・助川晃

洋編: 小中一貫・連携教育の実践的研究、163 - 172、東洋館出版社 (2014) 査読無

Yoshimi Miwa: Zur Genese der Schlagbewegung mit Geräten bei Schulkindern. Toshiyuki Ichiba(Hrsg.): Japan und Deutschland in der Globalisierung des Sports und der Sportwissenschaft、Hilltop Press 87 - 92 (2012) 査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三輪 佳見 (MIWA YOSHIMI)

宮崎大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 00182064